

## ブーガンヴィルが航海に 史上初めて学者を帯同した話

奥 正敬

### ■はじめに

フランスの数学者で軍人のルイ・アントワヌ・ド・ブーガンヴィル (Louis Antoine de BOUGAINVILLE, 1729-1811) は1766年に世界周航の旅に出ます。この年は世に言われる「大航海時代」から既に100年以上も経過しており、地理的な大発見は期待できませんでした。それでも南太平洋では多くの島々を調査するなど重要な成果を挙げて、フランス人として初めての世界一周を成し遂げたのでした。

この航海での新たな発見は『世界周航記』に纏められ、やがて日本も彼が活動した海域や島々と大きな関わりを持つことになります。

### ■フォークランドの入植地建設を志して

ブーガンヴィルはフランス・パリに生まれました。実兄で古代学者となるジャン・ピエールと共に勉学に励み、法学や数学に才能を示し、『積分論』を記して高い評価を得ています。このようなことから、哲学者で後に『百科全書』を編纂することになるジャン・ダランベールが推薦して1754年にロイヤル・ソサエティ (ロンドン王立協会) の会員になりました。その前年にはフランス陸軍に入隊しており、ヨーロッパ各国や新大陸を巻き込んで行われた七年戦争ではカナダのケベック防衛戦に従軍して軍功があったようです。

戦後は私財を投じて南大西洋のアルゼンチン沖のフォークランド諸島に入植地を建設しましたが、スペインに配慮するフランス政府から外交上の問題で手放すよう命令を受け、その代償として太平洋探検を中心にした世界周航の許可を得たのでした。

### ■南太平洋への航海

1766年、ブーガンヴィルは新造艦であるフリゲート艦ブードゥーズ号でフランス・ナント港を出港し、南アメリカで補給艦エトワール号が合流して、二隻から成る艦隊に総勢330名の遠

征隊を率いていました。

艦隊は大西洋からマゼラン海峡を通過して太平洋に入り、北西に進路をとってタヒチ諸島に寄港しています。続いてサモア諸島、ニューヘブリディーズ諸島から珊瑚海を北上し、ニューギニア沖からソロモン諸島、ニューギニア北東のビスマーク諸島、西進してマルク諸島、さらにバタビアを経てインド洋に出て、1769年にフランスのサン・マロに戻りました。

このように、太平洋の航海はポリネシアからメラネシアを横断するもので、調査が行き届いていない島嶼が存在する海域を対象にしていたのでした。

### ■航海目的の変化

この世界周航の特徴は植物学者や天文学者、測量技師などの専門家を同行させていることでした。これは世界の遠洋航海史上初めてのこととされています。<sup>(1)</sup> ブーガンヴィルが航海を志した時代はヨーロッパ人による発見が大方成し遂げられ、新たに大きな陸地を見付ける余地は殆ど残されていませんでした。このため、航海の計画は、彼が後に言う<sup>(2)</sup> 「私は旅行者であり船乗り」で、「(文化の) 顕著な相違」の「観察」などの言葉にならざるをえなかったのです。

従って、彼は遠洋航海自体がそれまでの地理的発見を目的としたものから、学術的な科学的調査に重点を移さなければならないことも事前に理解していたと考えられ、そのために専門的な知識人を帯同したわけです。因みに彼は学者の他に、商業担当官や軍医、司祭なども同行させています。

ブーガンヴィルがこの考え方を他に先んじて実施したことは、彼自身が学術研究に携わっていた学者出身の軍人であるが故えに成しえた決断でした。もちろん、フランス国内での科学技術の発展と共に、艦船に乗組員以外の人物を搭乗させるための居住性の向上など、造船技術の進歩を背景に取り得た方法です。こうしたことからか、彼の航海には植物学者の助手で男装の女性ジャンヌ・バレーが密かに同乗しており、結果的に初めて世界一周をなし得た女性<sup>(3)</sup> となった事実まで付随して現代に残されています。